

五騎がうちまで巴は討たれざりけり。木曾殿、「おのれ
格助・連体修飾格 四段・未 打消「ず」用
断定「なり」已

はとうとう、女なれば、いづちへも行け。我は討ち死に
副詞 四段・命

意思「む」終 断定「なり」終
せんと思ふなり。もし人手に**かからば**自害を**せん**ずれば、
サ変・未 四段・未 尊敬「らる」用 過去「けり」終
サ変・未 四段・未 尊敬「らる」用 過去「けり」終

木曾殿の最後のいくさに、女を**具せ**られたりけりなど
サ変・未 完了「たり」用

受身「る」未 当然「べし」未 四段・用 過去「けり」已
言はれんことも、**しかる**べからず。」と**のたまひ**けれども、
ラ変・未 打消「ず」用 過去「けり」体 受身「る」用 補助動・四段・用

なほ**落ち**も**行**かざりけるが、あまりに**言は**れたてまつり
上二・用 四段・未 ⑤作者↓木曾殿

て、「あつぱれ、よからうかたき**が**な。最後のいくさして
婉曲「む」体 形・ク・未 補助動・四段・未 意思「む」終 存続「たり」体 終助・願望 四段・用 過去「けり」已

見せたてまつらん。」とて、**控**へたるところに、武蔵の
下二・用 ④巴↓木曾殿 下二・用

国に**聞**こえたる大力、御田八郎師重、三十騎ばかりで
完了「たり」終 力変・用 四段・用 下二・用

出で来たり。巴、その中へ**駆け**入り、御田八郎に**押し並**べ
完了「たり」終 力変・用 四段・用 下二・用

て、**む**ずと**取**つて**引き落**とし、**わが乗**つたる鞍の前輪に
四段・用 存続「たり」体 (まえわ) 四段・用 促進便 四段・用 促進便

押しつけて、ちつともは**たら**かさず、**首**ねち切つて**捨**て
完了「つ」用 下二・用 四段・未 四段・用 促進便 下二・用

てんげり。その**もの**、**物具**脱ぎ捨て、東国の方へ**落ち**ぞ
完了「つ」用 (もの) 下二・用 上二・用 係助

行く。手塚太郎討ち死にす。手塚別当**落ち**にけり。
四段・未 完了「ぬ」用 上二・用 過去「けり」終 四段・用 過去「けり」体

今井四郎、木曾殿、主従二騎になつて、**のたまひ**けるは、
四段・用 促進便 ⑤作者↓木曾殿 四段・用 過去「けり」体

「口ごろは何とも**おほえぬ**鎧が、今日は**重**つなつたる**ぞ**」
打消「ず」体 四段・用 促進便 完了「たり」体 形・ク活用・用(ウ音便) 係助

「**や**。」今井四郎**申し**けるは、「御身もいまだ**疲れ**させたまは
間助 四段・用 過去「けり」体 尊敬「ます」用 下二・未 ⑤今井↓木曾殿

打消「ず」用 補助動・四段・未 四段・用 促進便 補助動・四段・未
ず、御馬も**弱**り**候**はず。何によつて**か**、一領の御着背長
四段・用 打消「ず」終 係助

を重つは**おほしめし**候ふべき。それは、御方に御勢が
四段・用 補助動・四段・未

候はねば、臆病で**こそ**さは**おほしめし**候へ。
① 打消「ず」已 係助 ⑤今井↓木曾殿 ①

五騎のうちまで巴は討たれなかつた。木曾殿は、

「お前は、女であるので、早く早く、どこかへ逃
げて行け。自分は討ち死に

しようと思つている。もし、敵の手にかかるなら
ば自害しようと思つので、

木曾殿の最後のいくさに、女を連れていたなどと、

言われるようなことも、あつてはならない。」と
おっしゃつたけれども、

やはり、(巴は)逃げていかなかつたけれども、
(木曾殿に)あまりに言われ申し上げて、

「ああ、良い敵に出会いたいものだ。最後の戦いを

して、(木曾殿に)見せ申し上げよう。」と云つて、
馬を止めて待つていたところに、武蔵の国で

評判の大力である、御田八郎師重が三十騎ほどを

連れ現れた。巴はその中へ駆けこんで、御田八郎
に馬を並べて、

むずと取り組んで(掴んで)馬から引き落とし、
自分の乗っている鞍の前輪に

押しつけて、全く身動きをさせず、首をねじ切つ
て捨ててしまった。そのあと、鎧などを脱ぎ捨て

て東国の方へ逃げて行つた。

手塚太郎は討ち死にした。手塚別当は逃げてしま
つた。

今井四郎と木曾殿が主従二騎となつて、
(木曾殿が)おっしゃつたことには、

「普段は何とも感じない鎧が、今日は重くなつた

ことよ。」今井四郎が申し上げたことには、
「お体もまだお疲れになつてはおりません、

御馬も弱つてはおりません。どうして、一領の
御着背長

を重くお思いになるはずがありませんか。

それは味方に軍勢がございませんので、
気弱になつてさうお思いになるのでしょうか。